

冷たい海もなんの！心意気見せる 加茂水産高 伝統「水開き」

鶴岡市の加茂水産高校（小
山和彦校長、生徒59人）の
伝統行事「水開き」が1日、
同校そばの加茂レインホー
ビ―チで行われた。生徒た
ちは水温13度という冷たい
海に入り、海で学ぶ水産高

生の心意気を見せていた。
水開きは同校創立の19
46（昭和21）年から、11
月1日の「水納め」ととも
に毎年続けている伝統行事。
今年は54人が海に入った。
この日は午前9時時点の

水温16・8度、水温13度。
海水温は昨年より1度低い
ものの、気温が高く、風も
穏やかで「水開き日和」に
恵まれた。体育館での開会
行事に続いてレインホービ
ーチ駐車場に移動し、「ワ

ッシヨイ、ワッシヨイ」と
両手を挙げて屈伸する準備
運動で気合を入れた後、「う
おお」「はっこい」などと
声を上げながら海に入り、
見守った保護者や教職員か
ら「頑張れ」の声援が飛ん
だ。



伝統の「水開き」で海に入り、「冷たい」と大声で叫びながら泳いだ女子生徒

互いに水を掛け合った
り、海中に潜ったりしなが
ら約50分を泳ぎ切ると砂浜
のたき火で暖を取り、アオ
サ汁で一息。ダイビングを
学びたくて進学したという
1年の黒坂晟真さん（15）は
「外が暖かい分、とっても
冷たく感じた。冷たすぎて
声も出せなかった。入らな
い人には絶対に分からない
と思う。水産高校で楽しい
3年間を送りたい」と話し
た。

もし海に沈んだら どうなるのかな？



加茂水族館で
水産高生

「温暖化で沈む国」水槽で表現

本館のタイトルは「アタウンシップ（水中の郷）」。サンゴ礁でできているツバルは海抜がわずか、海岸線が波で削られ「温暖化の脅威」にさらされているとを表現している。生徒は「ツバルの人たちのことを思いをはせながら表現した。このまま温暖化が進んだ場合、私たちの故郷もなくなってしまうのが、みんなで地球環境を守らなければならぬ」とメッセージを添えている。加茂水族館では、近くの加茂水産高校とのコラボレーション企画として生徒たちが自由に展示できるツバルの水槽を提供している。もう一方の水槽は「メダカの学校」。水槽の中に黒板や机を置き、本物のメダカを入れた。訪れた人たちは生徒たちの理想「ライオン」はいつも感心させられる」と注目を集めている。

もし本当に海に沈んでしまったらどうなるのか。鶴岡市立加茂水族館（奥泉和也館長）で「温暖化で沈む国」を表現した水槽が一目見えた。

加茂水産高校海洋資源科の生徒が北極と南極の水が解け出し「沈む国」として問題視されている太平洋に浮かぶ島「ツバル」を表した。水槽の中に家や橋の模型を配置。生き物としてタイリクバラタナゴと庄内金魚を入れた。



インターハイ出場を目指す中高選手



東北大会に備え、タックとジャイブの練習を繰り返し技術を磨いている



冬季トレで鍛錬レース感覚磨く

加茂水産高校ヨット部

鶴岡市の加茂沖で5月31日にある県大会に出場するのは、加茂水産高2年の中高選手のみ。大会に協力する社会人の艇と4レースを行い、6月20—22日に宮古市で開催される東北大会に備える。全長4mほどの一人乗り「ILCA6級」のクラスで、昨年惜しくも果たせなかったインターハイ出場を狙う。

中高選手は最上中出身。加茂水産高ヨット部OBの父・譲さんの勧めもあって、小学校中学年時から尾花沢市の徳良湖ジュニアヨット部に入り、競技を始めた。中学3年で鹿児島特別国体の少年男子ILCA6級に県代表として出場。ヨット競技の継続とともに、「将来のため水産の知識を学びたい」と、加茂水産高に進学。昨年の佐賀国民スポーツ大会にも出場した。

だが、昨夏のインターハイ出場はかなわなかった。3日間で計6レースを行う東北大会で、前半戦までは3位をキープし、インターハイ出場権の上位2位にあと一歩まで迫ったが、後半戦にミスが重なり、結果は15艇中5位。悔しさをばねに、海に出られない冬場はウエートトレーニングで下半身や肩、腕の筋力アップと持久力強化に励んだ。

ヨット部OBで同校初のインターハイ出場を成し遂げた同部顧問の佐藤勝則教諭(36)は「昨年の東北大会を終えてから、競技に向かう意識がより強くなり、技術が向上した上に冬のトレーニングで体力もついた」と、「後輩」の成長に太鼓判を押す。今月初めの秋田遠征に続き、今後は新潟遠征を行い、社会人たちの競技でレース感覚を磨く。東北大会に向け、両親から新艇がプレゼントされた。インターハイ出場権の2位以上を目指すレースが控えている。



インターハイ出場を

中寫 寿帆 選手
(最上中出身)

昨年の東北大会は前半で3位に入っ
て、少し気が緩んでしまい、後半のレ
ースは細かなミスが出てしまった。風
上と風下に方向転換するタックとジャ
イブ、スタートのクロスを繰り返し、
2年となった今年はインターハイに出
場したい。

加茂水高 伝統のカッターレース かいっぱいオールこぐ

鶴岡市の加茂水産高（小山和彦校長、生徒59人）恒例の「創立記念カッターレース大会」が4日、同市の加茂港内で行われた。生徒たちが息を合わせてオールをこぎ、海上の熱戦を繰り



広げた。

同校の創立記念日（7月5日）に合わせて毎年行われている水産高校ならではの伝統行事。全長約9㍎、幅約2・5㍎のカッターボートに、こぎ手12人と艇長、艇指揮が1人ずつの計14人

が乗り込み、途中で折り返す往復600㍎のコースでタイムを競う。今年は学年対抗のリーグ戦が行われ、2艇による対戦形式で計3レースが行われた。

この日は好天に恵まれ、波も穏やかで絶好のレース日和。合図とともに各艇が一斉にスタートし、艇指揮

息を合わせてオールを操る生徒たち。直線で見えるうちにスピードに乗った

の掛け声に合わせてこぎ手たちが長さ約4・3㍎のオールを力強く操った。300㍎先のブイをターンし、波しぶきを上げながらカッターを海面に走らせていた。

初戦で2年チームを下した生徒会長で3年の斎藤龍希さん（17）は「スタートダッシュに成功し、直線は全員が息を合わせてスピードに乗った。レースに参加するのは今年が最後と思うと感慨深い」と話していた。



加茂水産



前へ出る相撲で
勝利目指す
相撲

板垣 ^{じょう}成 選手
(3年、新潟・山北中出身)

今川 ^{れいら}令羅 選手
(1年、鶴岡二中出身)

個人選手権(無差別)と個人体重別(80^キ級)に出場する板垣選手は低い体勢からの押し相撲が得意。個人選手権に出場する今川選手は122^キの体格で当たり負けしない。ともに前へ出る相撲で勝利を目指す(8月8日―10日、鳥取市・ヤマタスポーツパーク鳥取県民体育館)

